

大学生の家族形成意欲と関連要因に関する調査研究

－男女共同参画社会に向けた若者への支援について－

サイトウ サチ コ ホシヤマ ヨシハル ウチヤマ アヤ コ
 齋藤 幸子*1 星山 佳治*3 内山 絢子*4
 コンドウ ヨウ コ ハラ ミ ツ コ ミヤハラ シノブ
 近藤 洋子*5 原 美津子*6 宮原 忍*2

目的 少子化問題研究の一環として、大学生を対象に青年の結婚の意思を規定する因子を調べることが目的とし、恋愛観、性役割観、価値観などを調査、次世代の家族形成支援の一助となる資料を得ようとした。

方法 首都圏の大学3カ所において、男女大学生を対象に集合調査法によるアンケートを実施し、有効回答252件を分析した。調査内容は、結婚の意思、子どもが欲しいか（以下、出産意欲）、恋愛観、性役割観などで、性別のほか、結婚の意思の有無により2群に分けて検討した。さらに、結婚の意思を規定する因子を探るため、男女別に多重ロジスティックモデル分析を行った。

結果 将来の結婚の意思は、「する」61%、「しない」2%、「わからない」33%、無回答4%であった。結婚の意思がないまたは未定の群でも、69%に出産意欲があった。男女の付き合い方や、生き方に関わる価値観で性差が認められ、デート・バイオレンスにつながるような行為の許容度や、「子どもを保育所に預けるのはかわいそう」など従来型の価値観を支持する割合は、男性の方が高かった。結婚の意思の有無別分析では、結婚群の性役割を支持する割合が高かった。性役割に関しては、男女共同参画社会の実現に賛成しながら、家庭内の固定的性役割分担にも賛成するという、女性に対するダブルバインドの価値観をもつ者の存在が認められた。結婚の意思についての多重ロジスティックモデル分析では、男女で異なる因子が見いだされたが、カップル形成に関わるという意味では共通する側面があった。女性では「カップル形成の見通しに関する肯定感」が強い因子であった。

結論 結婚の意思が未定でもそのうちの7割に出産意欲があることから、子どもをもつことの価値の高まりが、家族形成意欲を促すものと考えられた。価値観や結婚の意思を規定する因子は男女で異なっており、若者への家族形成支援においては、男女それぞれの価値観とカップルの関係性に注目することの必要性が示唆された。性別役割分担を支持する群の方が、将来結婚する可能性が高かったことについては、裏を返せば、男女平等を支持する群は、現在の結婚のあり方を支持できず回避する傾向があるということである。わが国が男女共同参画社会の実現をもって少子化問題を乗り越えようとするのであれば、多様な家族のあり方を認めるなど、男女平等を支持する者が家族形成を望むような社会環境を用意することが必須である。

キーワード 少子化、結婚、出産、家族形成、性役割観

*1 日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部主任研究員 *2 同客員研究員 *3 横浜創英大学看護学部教授

*4 目白大学人間学部教授 *5 玉川大学文学部教授

*6 社団法人東京都職員互助会東京都職員総合健康センター学校訪問相談室教育訪問相談員

I 緒 言

本研究は少子化問題研究の一環として、養育力を備えた次世代の家庭形成に寄与することを目標としている。家庭形成の基盤は男女のパートナーシップにあると考え、前回調査では高校生を対象に、恋愛への積極性や性役割観と将来の家族形成意識との関連を調べた。その結果、恋愛に積極的で、性役割を肯定している群が家族形成に積極的であることなどを明らかにした。すなわち、男女平等を支持する者は、結婚を回避する傾向があることが示唆された¹⁾。

そこで、本研究では、価値観の性差、性役割観と家族形成に着目し、高校生に続き大学生を対象に調査を実施した。青年期の恋愛観、性役割観、価値観、社会観などを調べ、結婚を規定する因子を探索し、男女共同参画社会における次世代の家族形成支援の一助となる資料を得ることを目的とした。

II 研究 方 法

(1) 調査概要

1) 対象と方法

首都圏の大学3カ所において、男女大学生を対象に集合調査法によりアンケートを実施した。一部は手渡しにより、返信用封筒にて回収した。集合調査法において251件（回収率100%）、手渡しの45通からは7件（回収率15.5%）の回答を得た。このうち既婚者と年齢30歳以上の6件を除いた252名を集計対象とした。調査時期は2011年12月～2012年3月であった。

2) 倫理的配慮

個別封筒を用意して回収するなどプライバシーに配慮し、調査内容と方法については、日本子ども家庭総合研究所倫理委員会の承認を得た（認証番号第45号、平成23年12月21日）。

3) 調査内容と調査項目一覧

アンケートは選択肢回答と記述回答合わせて29問で構成したが、以下には本研究で使用した項目についてのみ記す。

問1～4. 属性、問5～6. 出身中学・高校の共学か別学か、問7～12. 家族関連、問15. 男女の付き合い方全15項目（4件法）、問17. 将来、両親のような夫婦になりたいか（4件法）、問18. 自分が育ったような家庭を築きたいか（4件法）、問20結婚の意思、問21出産意欲・希望子ども数、問24. 性役割観・社会観など全16項目（4件法）、問26-1. 恋愛観・自己評価全14項目（4件法）、問26-2. 親密性全7項目（5件法）、問27～28. 自分の体格について、問29. ケイタイやネットの利用について設問作成に当たっては、文献2）3）4）を参考とし、親密性については、EPSI（エリクソン心理社会的発達段階目録）から7項目を使用した⁵⁾。

(2) 分析方法

男女別集計により性差を明らかにした。結婚の意思については、将来結婚する意思の有無により対象を2群に分けて比較し、さらに、多重ロジスティックモデルにより結婚の意思を規定する要因を男女別に分析した。性役割観については、クロス集計分析を行った。

群間の有意差判定はWilcoxonの順位和検定で行い、危険率0.05未満を有意差ありとした。

III 結 果

(1) 回答者のプロフィール

有効回答252件の性別は、男性85名（33.7%）女性167名（66.3%）であった。年齢は18～28歳で平均年齢は21歳、学年は1年1.6%、2年15.5%、3年67.5%、4年15.5%、大学院1.6%、専攻別の内訳は、文系77.3%、理系16.1%、芸術系6.6%で、いずれも性差はなかった。

現在、父が健在は92.1%・母健在は96.4%、両親と同居は60.3%、両親のいずれか1人と同居が9.7%であった。きょうだいは、なし7.9%、本人を含み2人きょうだい53.6%、3人30.2%、4人3.6%、5人0.4%であった。現在母親が就業している割合は、71.4%であった。

(2) 家族形成意欲

以下に述べる結果では%の小数点以下を省略(四捨五入)して表記する。

1) 結婚の意思

「あなたは将来結婚しますか」の設問に、「結婚する」とした割合は61%、「しない」2%、「わからない」33%、無回答4%であった。

以下、結婚の意思に関する分析では無回答を除き、「結婚する」を選択した154件を「結婚群」(66%)とし、「しない」「わからない」を選択した88件を「未定群」(34%)とする。各群の性別内訳は図1に示すとおりである。

2) 出産意欲

「将来子どもが欲しい」とした割合は全体の83%で性差はなかった。結婚の意思別にみると、結婚群96%・未定群69%と、結婚群の子どもが欲しいとした割合が高かった。希望子ども数については、「2人」が最も多く50%、「3人」23%、「1人」5%、「4人」1%で性差はなかった。未定群でも61%が希望子ども数を回答しており、平均は2.3人で、結婚群と未定群の間で差はなかった。結婚の意思が未定であっても、6～7割に出産意欲があることが明らかになった。

(3) 性別集計結果

4件法および5件法で尋ねた設問の得点の平均値と標準偏差を、性別に集計した結果を表1に示した。以下、表1から順位と検定で性差が認められた項目について述べる。

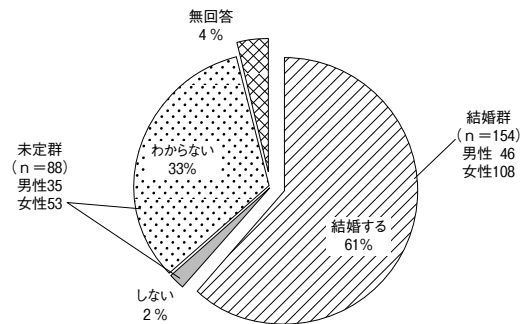
1) 男女のつき合い方についての設問

10項目中、「3. 未婚の男女が避妊しないで、セックスをする」「4. 恋人以外の人とセックスする」「8. 恋人が相手に無理にキスをする」「10. 恋人が無理に相手の身体に触る」の4項目で男性の値が有意に高かった。デート・バイオレンスにつながるような行為についての許容度は、男性の方が高かった。

2) 生き方に関する価値観についての設問

16項目中、「5. デートの費用は男性が払うべきである」「11. 子どもを保育園に預けるのははかわいそうなことである」の2項目で男性の値が有意に高かった。男性の方が従来型の価

図1 結婚の意思別集計の対象 (n=252)



値観を持っているといえよう。

3) 恋愛観や自己像に関する設問

14項目中、「3. 好きな人ができたら何とか自分の気持ちを伝えたい」「9. 自分の容姿に満足している」の2項目で男性の値が有意に高かった。一方、共感性を示す「12. 人が悲しんでいるのを見ると、自分も悲しくなる」では女性の値が高かった。

親密性は、下位項目では一部の項目で性差が認められたが、合計得点では性差は認められなかった。

(4) 結婚の意思別集計結果

結婚群と未定群別の集計結果を、表1の性別集計の右欄に示した。前項と同様に、順位と検定の結果、有意な差が認められた設問について以下に示す。

1) 男女のつき合いについて設問

10項目中「2. 結婚を前提としないで、同棲する」のみで差がみられ、未定群の同棲を支持する値が高かった。

2) 生き方に関する価値観についての設問

結婚観に関して「1. 生涯を独身で過ごすというのは、望ましい生き方ではない」は、結婚群の値が高かった。

子どもに関する項目は、「9. 子どもは、家庭に明るさや活力を与える」「10. 子どもを育てることは、やりがいがある」「12. 次世代の子ども達のために地球環境をよくしたい」の3項目で結婚群の値が高かった。

固定的な性役割観に関する「2. 男性は働い

て家計を支え、女性は家事・育児をするものである」「8. 女性の一番の幸せは、子どもを産み育てることである」の2項目では結婚群の値が高かった。

社会観に関する「14. 自分は社会のために何らかの貢献をしたい」「15. 自分の人生は社会への貢献なくしては考えられない」「16. 日本の将来には希望が持てる」の3項目では、結婚

表1 性別・結婚の意思別集計結果

	全体 (n = 252)		男性 (n = 85)		女性 (n = 167)		順位 和検定	結婚群 (n = 154)		未定群 (n = 88)		順位 和検定
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差		平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	
Q15男女のつき合いについて¹⁾												
1. 結婚を前提としないで、セックスをする	3.2	0.9	3.3	0.9	3.1	0.9		3.2	1.0	3.1	0.9	
2. 結婚を前提としないで、同棲する	2.8	1.0	3.0	1.0	2.8	1.0		2.7	1.0	3.1	0.9	**
3. 未婚の男女が避妊しないで、セックスをする	1.6	0.9	1.9	1.1	1.5	0.8	**	1.6	0.9	1.6	0.9	
4. 恋人のいる人が、恋人以外の人とセックスする	1.5	0.8	1.7	1.0	1.4	0.7	*	1.4	0.7	1.5	0.8	
5. 男性が結婚まで童貞でいる	3.3	0.9	3.2	1.0	3.4	0.8		3.3	0.9	3.4	0.9	
6. 女性が結婚まで処女でいる	3.4	0.9	3.3	0.9	3.5	0.8		3.4	0.8	3.5	0.9	
7. 恋人が相手のメール履歴をチェックする	1.6	0.9	1.8	1.1	1.5	0.7		1.7	0.9	1.5	0.8	
8. 恋人が常に相手の居場所を確認する	1.6	0.9	1.7	0.9	1.6	0.8		1.6	0.8	1.6	0.8	
9. 恋人が相手に無理にキスをする	1.6	0.8	1.8	1.0	1.5	0.7	*	1.5	0.7	1.6	0.9	
10. 恋人が無理に相手の身体に触る	1.5	0.8	1.7	0.9	1.4	0.6	*	1.5	0.7	1.5	0.8	
Q24生き方に関する価値観²⁾												
1. 生涯を独身で過ごすというのは、望ましい生き方ではない	2.6	1.1	2.7	1.2	2.6	1.0		2.9	1.1	2.3	1.0	**
2. 男性は働いて家計を支え、女性は家事・育児をするものである	2.2	0.9	2.3	1.0	2.1	0.9		2.3	0.9	1.9	0.8	**
3. 共働き夫婦でも、家事・育児はもっぱら女性がした方がよい	2.0	0.8	2.0	0.9	1.9	0.8		2.0	0.8	1.9	0.8	
4. デートは男性から誘うべきである	2.2	0.9	2.1	0.9	2.2	0.9		2.2	0.9	2.1	0.8	
5. デートの費用は男性が払うべきである	2.0	0.9	2.2	0.9	1.9	0.8	*	2.0	0.9	1.9	0.8	
6. 男性と女性が、互いのことを理解するのは難しい	3.0	0.9	3.0	1.0	2.9	0.8		2.9	0.8	3.0	0.9	
7. 男らしさ、女らしさにこだわらないで個性を発揮した方がよい	3.3	0.8	3.3	0.8	3.3	0.7		3.3	0.7	3.3	0.8	
8. 女性の一番の幸せは、子どもを産み育てることである	2.1	0.9	2.1	0.8	2.1	0.9		2.3	0.9	1.8	0.7	**
9. 子どもは、家庭に明るさや活気を与える	3.5	0.7	3.5	0.7	3.6	0.7		3.7	0.5	3.3	0.7	**
10. 子どもを育てることは、やりがいがある	3.5	0.7	3.5	0.7	3.5	0.6		3.7	0.5	3.3	0.7	**
11. 子どもを保育所に預けるのはかわいそうなことである	2.3	0.9	2.6	1.0	2.2	0.9	**	2.3	0.9	2.3	0.9	
12. 次世代の子ども達のために地球環境をよくしたい	3.2	0.8	3.1	0.9	3.3	0.8		3.3	0.8	3.0	0.8	**
13. わが国は男女共同参画社会を目指すべきだ	3.2	0.8	3.1	0.8	3.2	0.7		3.2	0.8	3.1	0.7	
14. 自分は社会のために何らかの貢献をしたい	3.2	0.8	3.1	1.0	3.2	0.8		3.3	0.8	3.0	0.9	*
15. 自分の人生は社会への貢献なくしては考えられない	2.4	0.9	2.3	1.1	2.4	0.8		2.5	0.9	2.2	0.9	**
16. 日本の将来には希望が持てる	2.2	0.9	2.1	0.9	2.3	0.9		2.3	0.9	2.0	0.9	**
Q26-1 恋愛観・自己像³⁾												
1. 早く恋人が欲しい (もういるまたは既婚の場合は4に○)	3.2	1.0	3.2	1.0	3.2	0.9		3.4	0.9	2.8	0.9	**
2. いつか人生をともにするパートナーに出会えると思う (同上)	3.3	0.8	3.2	0.9	3.3	0.8		3.6	0.6	2.7	0.8	**
3. 好きな人ができたら、何とかして自分の気持ち伝えたい	3.0	0.9	3.4	0.7	2.9	0.9	**	3.3	0.8	2.7	0.9	**
4. 愛し合っていれば性交渉があるのは当然だと思う	3.2	0.8	3.3	0.8	3.2	0.9		3.4	0.8	2.9	0.9	**
5. 私は、どちらかというと言食系である	2.9	1.0	3.0	1.0	2.8	1.0		2.7	1.0	3.2	0.9	**
6. 私は、どちらかというと言肉食系である	2.2	1.0	2.2	1.0	2.2	0.9		2.3	1.0	1.8	0.9	**
7. 自分の性 (男または女) に生まれてよかったと思う	3.3	0.8	3.3	0.8	3.3	0.8		3.5	0.7	3.1	0.8	**
8. 私には、他の人にな、よいところがある	2.8	0.9	2.9	0.9	2.7	0.9		2.9	0.9	2.6	0.9	
9. 自分の容姿に満足している	2.2	0.9	2.4	1.0	2.1	0.8	**	2.2	0.9	2.1	0.8	
10. 将来の計画や目標をもっている	2.8	1.0	2.8	1.0	2.9	0.9		3.0	0.9	2.6	1.0	*
11. 困難なことにぶつかると、かえってやる気がでる	2.5	0.9	2.6	0.9	2.4	0.8		2.5	0.9	2.4	0.9	
12. 人が悲しんでいるのを見ると、自分も悲しくなる	3.2	0.8	3.0	0.9	3.3	0.7	*	3.3	0.7	3.0	0.8	**
13. 子どもの頃、異年齢集団で遊んだ経験がある	3.3	0.9	3.3	0.9	3.3	0.9		3.3	0.9	3.2	0.9	
14. 大切に育てられた	3.6	0.6	3.4	0.7	3.6	0.6	*	3.7	0.6	3.4	0.6	**
Q26-2 親密性⁴⁾⁵⁾												
Q26-2 親密性合計	16.6	4.3	16.0	4.5	16.9	4.2		17.4	4.2	15.3	4.1	**
1. 誰かに個人的な話をされると、私は、とどまってしまう (R)	2.4	1.0	2.1	1.1	2.5	1.0	**	2.4	1.0	2.3	1.0	
2. 私は、特定のひとと深いつきあいができる	3.2	0.8	3.1	0.9	3.2	0.7		3.3	0.7	3.1	0.8	
3. 私は、あたたかく親切な人間である	2.5	0.9	2.6	0.9	2.5	0.8		2.6	0.8	2.3	0.8	*
4. 私は、もともとひとりぼっちである (R)	2.2	1.2	1.9	1.2	2.3	1.1	**	2.4	1.1	1.9	1.1	**
5. 私は、他の人たちと親密な関係を持てている	2.8	0.8	2.7	0.9	2.8	0.7		2.9	0.8	2.6	0.7	**
6. 私は、他の人よりも目立つのを好まない (R)	1.5	1.1	1.7	1.1	1.4	1.1	*	1.6	1.1	1.4	1.1	
7. 私は、他の人たちとよくなか親しくなれない (R)	2.1	1.2	2.0	1.2	2.2	1.1		2.3	1.2	1.9	1.1	*

注 1) 4件法選択肢: 1 よくない, 2 どちらかというときよい, 3 どちらかというときまわらない, 4 かまわらない

2) 4件法選択肢: 1 そう思わない, 2 あまりそう思わない, 3 ややそう思う, 4 そう思う

3) 選択肢: 1 当てはまらない, 2 あまり当てはまらない, 3 まあ当てはまる, 4 当てはまる

4) 選択肢: 0 全く当てはまらない, 1 ほとんど当てはまらない, 2 あまり当てはまらない, 3 かなり当てはまる, 4 とてもよく当てはまる

5) n は 1～7 にすべて回答したサンプル数

6) Q26-2 の選択肢に付した (R) は逆転項目を示し、回答の 0～4 を、4～0 に変換して計算した。

7) *p < 0.05, **p < 0.01

表2-1 多重ロジスティック・モデル説明変数一覧

Q17 「両親のような夫婦になりたい」(4件法) Q18 「育ったような家庭をつくりたい」(4件法) Q21-1 「将来子どもが欲しい」 Q21-2 「希望子どもの人数」 Q24 生き方に関する価値観16項目(各4件法) ¹⁾ Q26-1 恋愛観や自己像に関する14項目(各4件法) ¹⁾ Q26-2 親密性7項目(各5件法)および合計得点 ¹⁾ Q27-1 身長:自己評価(3件法) Q27-2 身長:実際の値	Q28-1 体格(体重):自己評価(1やせている・2普通・3ふとっている) Q28-2 体格(体重):実際の値 Q29-1 メールのやり取り(通/日) Q29-2 電話の通話時間(分/日) Q29-3 インターネット(分/日) Q29-4 ソーシャルネットワークサービス BMI (Body Mass Index) 評価(1やせ・2普通・3肥満) ²⁾
---	---

注 1) 下位項目は表1を参照

2) BMI=体重(kg)/身長(m)²

表2-2 多重ロジスティック・モデル:男性(n=76)

群の値が高かった。

以上から、結婚群は未定群に比べ、肯定的な子ども感、子育て観をもち、社会貢献に積極的である一方、固定的な性役割観を持つ割合が高いといえる。

3) 恋愛観や自己像に関する設問

恋愛に関して設問した項目は表1に示

す1～6のすべてで差が認められ、恋愛への積極性を示す項目はすべて結婚群の値が高かった。さらに、達成動機「10. 将来の計画や目標をもっている」、共感性「12. 人が悲しんでいるのを見ると、自分も悲しくなる」、親密性の合計得点の平均値でも、結婚群の値が高かった。

結婚群は未定群に比べ、恋愛に積極的で、達成意欲、共感性、親密性が高かった。

(5) 結婚の意思を基準変数とした多重ロジスティックモデル分析

前項までに、大学生の意識や価値観の性差、および結婚群と未定群の違いを明らかにしたが、総合的にみた将来の結婚を規定する要因を探るため、結婚意思を基準変数[結婚する=2, わからない・しない=1]として男女別に多重ロジスティックモデルを用いて分析した。

用いた説明変数は、表2-1に示す全52項目からモデル内で有意な変数のみとした。その結

	係数 (標準誤差)	オッズ 比	95%信頼区間 (下限, 上限)
Q26-1-3 好きな人ができたら、何とかして自分の気持ち伝えたい	1.33(0.45)	3.79	(1.56, 9.22)
Q26-1-7 自分の性(男または女)に生まれてよかったと思う	1.35(0.44)	3.86	(1.63, 9.15)

注 基準変数名Q20-1 結婚の意思: 結婚する=2, わからない・しない=1 (分割点: 1.5)

表2-3 多重ロジスティック・モデル:女性(n=155)

	係数 (標準誤差)	オッズ 比	95%信頼区間 (下限, 上限)
Q24-2 男性は働いて家計を支え、女性は家事・育児をするものである	0.63(0.28)	1.88	(1.09, 3.22)
Q26-1-2 いつか人生をともにするパートナーに出会えると思う	2.04(0.37)	7.72	(3.76, 15.84)

注 基準変数名Q20-1 結婚の意思: 結婚する=2, わからない・しない=1 (分割点: 1.5)

果表2-2、表2-3に示すように、男性では、Q26-1-3「好きな人ができたら、何とかして自分の気持ち伝えたい」とQ26-1-7「自分の性(男または女)に生まれてよかったと思う」が採用され、女性では、Q24-2「男性は働いて家計を支え、女性は家事・育児をするものである」とQ26-1-2「いつか人生をともにするパートナーに出会えると思う」が採用された。オッズ比から解釈すると、男性ではQ26-1-3とQ26-1-7が強い程、結婚の意思が強くなり、女性ではQ24-2とQ26-1-2が強い程、結婚の意思が強くなる。特に女性のQ26-1-2ではオッズ比が7.7と高かった。

(6) 性役割観のダブルバインド

性役割観について、「男性は働いて家計を支え、女性は家事・育児をするものである」を肯定する回答は、結婚群43%・未定群25%と、固定的な役割観を持つ割合は結婚群が高かった。

一方「わが国は男女共同参画社会を目指すべき」については両群ともに8割が肯定して、差がなかった。すなわち一部に「家庭における性役割を肯定し、共同参画社会を肯定する」いわば矛盾する回答があることが推測できた。女性にとっては、社会参加と家庭にいることを同時に要求されるダブルバインドの価値観といえる。

そこで、この2つの項目をクロス集計した結果、「家庭における性役割を肯定し、社会参画を肯定する」（ダブルバインド）割合は、結婚群が34%と未定群19%と比べて高かった。これを男女別に図2に示した。ダブルバインドの考えを持つ割合は男性の43%、女性の28%で、男性が高かった。結婚の意思別では、男女ともに結婚群が高かった。この図から、男性の結婚群の約半数は、矛盾した価値観のまま結婚を志向しているということがいえる。

Ⅳ 考 察

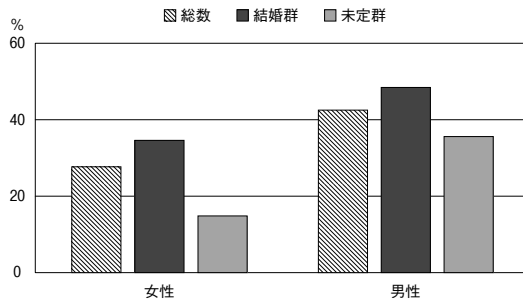
（1） 家族形成意欲とその規定因子

大学生で将来「結婚する」とした結婚群が6割にとどまる一方、将来「子どもが欲しい」とした割合は全体の約8割で、出産意欲が結婚意欲を大きく上回っていた。結婚群では、ほぼ全員に出産意欲があり、子どもや子育てに肯定的な価値観を持つなど、結婚と出産が強く結びついているといえる。一方、未定群でも7割が子どもを希望しており、結婚の意思がはっきりしていなくても、出産意欲があることがわかった。子どもを持つことの価値が、家族形成意欲を促すものと考えられる。

では、子どもは欲しいが結婚を躊躇する理由はなにかであるが、これまでは主に経済的理由で説明されてきたといえよう。雇用の不安定や、子育てにお金がかかりすぎるなどである。しかし、母子保健学的見地からは、それらで少子化の理由を十分に説明しているかは疑問であり、以下に示す若者の性行動の不活発化や家族形成意欲の低下傾向に注目した。

第7回青少年の性行動全国調査では、高校

図2 性別・結婚の意思別矛盾した性役割観をもつ割合：「男女共同参画に賛成、家庭内の固定的性別役割分担にも賛成」



生・大学生の性行動や結婚意識が消極化していることが指摘されており⁶⁾、第14回出生動向基本調査²⁾では、結婚を望んでいる未婚者は9割弱であるが、現在「交際している異性はいない」と回答した割合は、男性6割、女性5割と、いずれも前回調査に比べて大幅に増えていることが報告されている。さらに、希望子ども数について守泉⁷⁾は、男女の逆転を指摘している。すなわち1982～2010年まで男性のほうが女性より希望する子ども数が多かったが、2005年から逆転しており「男性の子どもを持つ意欲をこのまま低下させないことが重要である」としている。

これらの変化は、生物学的、社会的、さらに相互関連要因が考えられるが、本研究では、今回の調査項目から、大学生における結婚の意思を規定する要因を多重ロジスティックモデルで分析した。その結果、結婚の意思を強くする因子として見いだされたのは、男性では、好きな人ができたら何とかして自分の気持ち伝えたいという「恋愛への積極性」と、男に生まれてよかったという「自己の性の肯定」、女性では、男性は働いて家計を支え、女性は家事・育児という「性役割分担の肯定」と、いつか人生をともにするパートナーに出会えると思うという「カップル形成の見通しに関する肯定感」であった。

男女で異なる項目が採用されたが、その内容には共通する側面もみることができる。すなわち、男性因子「恋愛への積極性」と女性因子「カップル形成の見通しに関する肯定感」は、

カップル形成の高い可能性を表すものであり、特に女性ではオッズ比が7.7と高く、決定的な要因といえた。また、男性因子「自己の性の受容」と女性因子「性役割分担の肯定」は、性と性役割の現状肯定という側面である。

これら4つの因子は男女の関係性という、さらに大きなテーマにも関わる内容ともいえる。男性は自己の性の肯定に基づいた恋愛への積極的態度を持ち、女性は、いつか出会えるというどちらかというのを待ち受ける、カップル形成における男女の役割パターンを表しているとも考えられる。カップルにおいて、この性と性役割分担の肯定に基づいた関係性がそのまま継続されるか、あるいは何らかの理由で変化していくのかは、その後の家庭のあり方とその支援に関連すると考えられ、家庭の養育力の基盤として注目して行く必要があるといえる。

(2) 性役割に関するダブルバインド

平成24年度「男女共同参画社会に関する世論調査」⁸⁾において、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という考え方を支持する割合が全体で52%と過半数を超え、1992年以来、賛成派が初めて増加したことが報じられた。20代で特に伸び率が多く、2009年の調査に比べて男性は21%増えて56%、女性は16%増えて44%となっている。男女共同参画社会の実現へ向けて価値観の変革が説かれる中、逆行するような傾向がみられることについてはその背景を調べ、注視していく必要があろう。

本研究では、結婚の意思のある群の方が性別役割分担を支持する割合が高く、前回の高校生調査の結果と同様であった¹⁾。裏を返せば、男女平等を支持する者は結婚を回避する傾向があるということであり、現状の結婚生活における男性に多くかかる扶養義務、女性に多くかかる家事・育児の精神的、肉体的負担などを回避しようとするものと考えられる。

一方、「わが国は男女共同参画社会を目指すべきだ」は全体で83%であり、この方向性はほぼ支持されていた。しかし、家庭内の「性別役割分担を否定する」平等志向の割合は、全体で

62%とより低い値を示しており、男女共同参画社会を目指すことと、家庭内の性役割分担の両方を支持するダブルバインドの価値観をもつグループがあることがわかった。このダブルバインドの価値観は「結婚する」と答えた群に多かったが、実際に結婚に至るか否か、またその結婚の継続可能性は未知数である。さらなる実証的な研究が必要といえよう。

V 結 論

将来の結婚の意思未定群でも7割に出産意欲があることがわかった。子どもをもつことの価値の高まりが、家族形成意欲を促すものと考えられた。

価値観では男性の方が従来型価値観をもつなど性差が認められ、結婚の意思についての多重ロジスティックモデル分析では、男女で異なる因子が採用された。性役割に関するダブルバインドの問題もあり、家庭養育力の基盤として、男女それぞれの価値観と互いの関係性に注目し、対象に即した家族形成支援につなげていくことが重要である。

結婚すると答えた群は、固定的な性役割観を持つ割合が高かった。わが国が男女共同参画社会の実現をもって少子化問題を乗り越えようとするのであれば、男女平等を支持する者が家族形成を望むような社会環境を用意することが必須である。子育てを支援する多彩なプログラムを用意するなど、仕事と家庭の両立を可能にすることは言を待たないが、結婚未定群の方が同棲の支持率が高かったことや、出産意欲の割合が結婚の意思ありの割合を上回ったことなどから、婚姻制度そのものの見直しや、多様な家族のあり方を受け入れる社会の実現が望まれよう。

本研究は、平成23年度日本子ども家庭総合研究所チーム研究「少子社会における成人期への移行に関する母子保健学的研究(3)」として行った⁹⁾。

文 献

- 1) 齋藤幸子, 星山佳治, 内山絢子, 他, 高校生の恋愛観・性役割観と家族形成意欲に関する調査研究－男女共同参画社会に向けた若者への支援について－, 厚生指標 2013: 60(1): 17-24.
- 2) 第14回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査」独身者調査の結果概要, 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ, (http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp) 2011.11.25.
- 3) 北村邦夫, 「第5回男女の生活と意識に関する調査」結果, 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)「望まない妊娠防止対策に関する総合的研究」, 分担研究報告書「人工妊娠中絶の減少要因に関する研究」, 平成23年3月; 14.
- 4) 総務庁青少年対策本部, 現代青少年の発達課題に関する研究調査－生活体験と非行との関係を中心として－, 平成7年3月; 101.
- 5) 中西信男, 佐方哲彦, EPSI－エリクソン心理社会的段階目録検査－, 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック第2版, 東京: 西村書店, 2001; 365-76.
- 6) 第7回青少年の性行動全国調査, 日本性教育協会ホームページ (http://www.jase.faje.or.jp/jigyo/journal/seikyoiku_journal_201208.pdf#search=) 2013.3.27.
- 7) 守泉理恵, 希望子ども数の男女差の変化, 厚生指標 2013: 60(1): 45.
- 8) 内閣府大臣官房政府広報室, 男女共同参画社会に関する世論調査(平成24年10月調査)平成24年12月17日発表, 内閣府ホームページ (<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/index.html>) 2013.3.27.
- 9) 齋藤幸子, 宮原忍, 内山絢子, 他, 少子社会における成人期への移行に関する母子保健学的研究(3) 大学生の恋愛観・将来観に関する調査, 日本子ども家庭総合研究所紀要第48集, 2012: 48; 103-22, 日本子ども家庭総合研究所ホームページ (<http://www.aiiku.or.jp/aiiku/kiyo/kiyo48.htm>) 2013.3.27.